台湾語の“來去（LÂI-KHÌ）”と主体化（上）

劉　　綺　紋

1. はじめに：台湾語について

台湾語のことを、その口語（話し言葉）について一般の台湾人は「台語」「台湾話」と言い、それによって書かれた文章は「台文」と言う。また、学術的には「台語」「台湾閩南語」「台文」「台語文」「台湾語文」などの用語が用いられている。日本では、「台湾語」以外に、「閩南語」[1]という用語も使われている。

確かに、台湾語は本来は閩南（福建省南部）の泉州語と漳州語にその起源を持つ。しかし三百年以上独自に発展した結果、音韻体系・語彙・言語使用など、さまざまな面で変化し、現在では独自の様相を呈している。

まず、音韻体系の変化について、“歌仔冊”のなかの記録から見出すこ

---

[1] 閩南語のことを、台湾では「福佬話（Hok-ló-uē）」、「鶴佬話（Hóh-ló-uē）」、「河洛話（Hô-lo̍k-uē）」とも呼ぶ。「福佬話」は福建省の言葉の意で、「鶴佬話」は洪惟仁（1992）の用語である（後述）。「河洛話」は閩南語がもともとは中国の河洛（中原、中華文化の発祥地で黄河中下流域にある平原）の言語であったとするが、この用語は正確ではないと考える研究者もいる（例えば洪惟仁1992、董忠司ほか2010）。確かに古代漢語の語彙や音韻に由来するものが閩南系諸語には多く見られる（連雅堂1987、邱德修2009など）。しかし客家語、日本語、韓国語などにも多く見られるし、漢語由来ではない語彙や音韻も閩南系諸語には多い。古代漢語が中国の中原より周辺の地域に残っているのは、あるいは柳田（1930）の言う「方言周圏論」と関係があるのかもしれない。ただし、方言周圏論の考え方自体はそれ以前にすでにJ・シュミットのWellentheorie（波状伝播説）（1872）に見られると言う（柳田1980: 237柴田武氏の解説）。

とができよう。“歌仔冊”は台湾現存の文字資料の中で、台湾語、閩南系諸語、若干の客家語などが表音文字で書かれている唯一の記録である（杜建坊2008: 1, 49）。その分野は、文学・言語・伝説・戯曲・歌謡・習慣・料理・時事・自然・地理・職業・歴史・故事など実に多岐に渡り、当時の口語や生活を知るのに大変貴重な資料となっている（杜建坊2008: 49）。“歌仔冊”の歴史について、杜建坊（2008）は出版された年代によってそれを四つの時期に分けている。第一期は「清朝刊行本（“清刊本”）」が主で[2]、第二期は閩南や上海などの出版物が主であり、それらの口語記録はいずれも泉州語や厦門語（アモイ語）によるものが多く、漳州語はあまり見られないとしている。第三期（1895-1945）は台湾の出版物が主となり、漳州語の記録が大分増えているとしている。さらに第四期（1945年以後、最終期）はやはり台湾の出版物が主であり、その口語記録はすでに泉州語なのか漳州語なのかはっきり区別できなくなり、両言語が融合したものになっている、としている（杜建坊2008: 50-51）[3]。

つまり、泉州語と漳州語が台湾に伝来した後、時間が経つにつれ、両言語の音韻体系[4]が段々と混合し、どちらでもない台湾独特の音韻体系が形成されたということである。この台湾独特の音韻体系を、王育徳氏は一連の研究で「漳州語でもなく、泉州語でもない（“不漳不泉”）」と言い（王育徳2002a; 2002b; 2012など）、洪惟仁（1992: 86）は「台湾優勢音韻体系（“台灣優勢腔”）」と呼ぶ。張屏生（2007）は「（台湾）普通音韻体系（“普通腔”）」と言い（冊一p.66, 同巻末「台湾地区漢語方言分布図」）、董忠司ほ

---

[2] 杜建坊（2008）によると、最初に出版された“歌仔冊”は清朝1826年の『新傳台灣娘仔歌』だと言う（p.1, 49）。

[3] “歌仔冊”の時期を三つや五つに分ける研究者もいる。例えば林香薇（2012）では五つの時期に分け、第一～二期は閩南で出版されたものであり、それぞれの時期は清朝と清朝以後である。第三～五期は台湾で出版されたものであり、それぞれ1916～1945年、1945～1970年、1970年以後だとしている（p.232）。

[4] 泉州語と漳州語の音韻体系はもともと異なる。さらに泉州語自体も、いくつかの異なる音韻体系が含まれているとされている（洪惟仁1992、盧廣誠2003）。

か（2010: 17-18）は「台湾通行音韻体系（“台灣通行腔”）」と言っている。

また洪惟仁（1992）は次の表（1）を挙げ、いわゆる閩南語の話者人口おおよそ5,050万人のうち、閩南にいる人口は半分に満たないとする。そのため洪惟仁（1992）はこの系統の言語を「閩南語」と呼ばずに、より包括的な「鶴佬語」（“鶴佬話”）という用語で呼ぶ（pp.241-251）。本稿ではこの系統の言語総称をさしあたり「閩南系諸語」と呼ぶこととする。

表（1）

〈中国〉	浙江省南部	200万人
	閩南（福建省南部）	1,000万人
	潮州（広東省東部）	1,000万人
	海南島	500万人
〈台湾〉		1,500万人
〈東南アジア〉		850万人

（洪惟仁1992: 248）

洪惟仁（1992）によると、上記の（東南アジアの話者を除いた）閩南系諸語話者のうち、台湾語話者は、潮州語や海南島語の話者とは完全に通じないとし、閩南の泉州語／漳州語／厦門語の話者とのみ言葉が通じるとしている。また一般の台湾人は、初めて泉州語を聞いた場合その内容の約六割しか聞き取れないと言う（洪惟仁1992: 243-244, 247）。

一つの言語の方言か異なる言語かの線引きはなかなか困難であるが、もし音韻体系が多少違っていても互いに通じるなら一つの言語の方言だとし、その違いが互いに通じないほど大きいものを別々の言語だとするのであれば、台湾語と泉州語／漳州語／厦門語とは方言間の関係になり、潮州語や海南島語とは別々の言語になると言えるだろう。さらに言えば、いわゆる閩南語という用語が指しているものすべてが一つの言語だとはもう言い切れないのかもしれない。その内実が多様であるからこそ、本稿では「閩南系諸語」と呼んでいるのである。

次に、語彙の面についてだが、それは音韻体系以上に、台湾語と泉／漳／厦諸語とは異なっている。それは、台湾語ではもともと台湾に住んでいたオーストロネシア語族の言語・文化・習慣の影響を受けて新しい語彙が出来たり、オランダ語や英語などの語彙の他に、日本統治時代から現在にかけて多くの日本語の語彙を取り入れたためである（連雅堂1987、洪惟仁1992、鄭良偉1997、王育徳2002a; 2012、邱德修2009、教育部2011など）。

さらに言語使用においても、台湾語は他の閩南系諸語と異なっている。一般に、台湾語（特に台北方言）は泉州語や漳州語以上に、厦門語に似ているとされる。それは、厦門語も泉州語と漳州語が混合したものだからである。しかし、台湾語と厦門語は音韻体系や語彙の面で異なっている部分もあり、また、言語使用も異なっている（王育徳2002a; 2002b; 2012、洪惟仁1992）。例えば洪惟仁（1992）は「四文字語（four-letter word）」の使用について次のように述べている。台湾では通常女性がすでにその使用能力を失っている四文字語を、厦門では女性がまだよく使っている。洪氏はそれにじっくり耳を傾ける経験があり、その使用能力の高さに感心し、“鶴佬話”を愛する者として気に入っていると言う（洪惟仁1992: 246）。これは単なる一例に過ぎず、言語使用の実態についてはさらに現地調査を行う必要があるが、しかし地理・政治などの隔たりにより、それぞれの地域が歴史的な変化で独自に発展してきたため、それが言語使用にも影響を与えていることは充分にあり得ることである。

以上に述べてきたように、台湾語は確かに閩南系諸語の一つではある。しかし、閩南系諸語は使用地域により互いに音韻体系・語彙・言語使用など、さまざまな面で異なっている。そのため、台湾語を単に閩南語と呼ぶのは紛らわしいのではないかと考える。閩南系諸語の一種であり、台湾で使われているものだという意味なら、あるいは、台湾で使われているその他の言語（中国語、客家語、オーストロネシア語族の諸言語など）と区別するという意味で、それを「台湾閩南語」と呼ぶのもいいだろう。しかし、台湾で最も多くの人口（洪惟仁（1992: 103）によると75％以上）が母語と

する言語だという意味では、あるいは、「台湾語（“臺語”“臺灣話”）」という呼称がすでに現地で長い間使われ親しまれてきたという意味では、単に「台湾語」だけでいいだろう。本稿でもこの言語を「台湾語」と呼ぶこととする。

さて、本稿は台湾語の“來去”について、中国語との関連も視野に入れて認知言語学的な観点から考察するものである。まず、次の第2節では“來去”の意味について述べる。そして第3節では、“來”と“去”の概念内容とプロトタイプ的意味を確認し、第4節では“來去”のある一つの意味について分析する。さらに次稿では“來去”のその他の意味の分析や、主体化の観点からの概念操作の説明などを試みることとする。

2. 台湾語の“來去”について

台湾語の語彙には、漢語由来のものと、漢語由来ではないものと、どちらなのかはっきりしないものとがある（王育德2002a; 2012）。例えば、“來(lâi)”（来る）と“去(khì)”（行く）という二つの台湾語の語彙はいずれも漢語由来のものである。この二つの語彙は台湾語だけではなく、現代中国語にも存在し（“來(lái)”／“去(qù)”）、しかも、台湾語の“來(lâi)”／“去(khì)”と中国語の“來(lái)”／“去(qù)”とは、そのプロトタイプ的用法（典型的用法）から拡張したさまざまな用法まで、共通するものが多い。

しかし、異なる用法もある。例えば、“來去”という動詞は台湾語にはあるが、現代中国語には基本的にない[5]。台湾語の“來去（lâi-khì)”の意味に

[5] “來去”は古代漢語にはある。例えば、“蒼生望已久，來去不應遲。”（唐・岑参・送嚴黄門拜御史大夫再鎮蜀川兼覲省詩）など。また“來去”は現代中国語でまったく見られないというわけではなく、実は文学作品や歌謡曲のタイトル、組織やイベント名などでも見られる。しかしその殆どは台湾のものである。例えば“食尚玩家――來去住一晩”は台湾のテレビ番組名であり、“社團法人台灣來去華語協會”は台湾にいる外国人や外国にいる台湾人の台湾語／中国語／客家語教育を推進する台湾のNGO団体の名前である。中国語にあえて台湾語の“來去”を入れることにより、台湾風に表現しようとするものだと思われる。ただしそれは、

ついて、台湾教育部（2011）『臺灣閩南語常用詞辭典』では次の三項目を挙げている[6]。

A. 動詞。ここから離れる（“離開此處”）。合音は“laih”と読む。

現代中国語ですでに定着した表現となったわけではない。なお、特に説明しない限り、本稿で言う中国語は現代中国語のことを指す。

[6] 本稿の台湾語表記は漢字とローマ字（“羅馬字”）の交じり書きを用い、その漢字とローマ字はいずれも『臺灣閩南語常用詞辭典』（ネット版、2011年）に基づく。この百年余りの間、台湾語が台湾で圧倒的多数の話者人口を持っていたにもかかわらず、外来の政治体制により相次いで「国語（標準語）」となったのは日本語、中国語であり、台湾語の使用はむしろ制限されてきた（盧廣誠2003など）。そのため、いまだに台湾語の正書法は確立されていない。漢字表記は書き手によって大きく異なり、規範となるはずの辞書ですら統一されていない。一方、発音表記は、十九世紀にほぼ現行の形に出来上がっていた「教会ローマ字」（一般に「白話字」と呼ばれる）によるローマ字表記が長い間使われてきたが、他の体系のローマ字表記や注音字母表記（例えば吳守禮2000）なども併存していた。そこで、台湾教育部（文科省）が「教会ローマ字」に若干手を加え、2006年10月14日に「台湾閩南語ローマ字表記案」（“臺灣閩南語羅馬字拼音方案”。“臺羅”と略称）を公告し、さらに2007年から2008年にかけて数回「台湾閩南語推薦用字」を公告。その上で、台湾語の『臺灣閩南語常用詞辭典』ネット版（2008年10月に台湾学術ネット試用版、2011年7月に台湾学術ネット正式版）を公開した。これが台湾政府による、台湾語の漢字とローマ字の正書法を初めて確立しようとする試みである。

また、台湾語の文章の表記は、研究者や書き手によって意見が分かれており、三種類ある。一つ目は全て漢字で表記するもの（“全漢臺文”。“全漢”と略称）、二つ目は全てローマ字で表記するもの（“全羅臺文”。“全羅”と略称）、三つ目は漢字とローマ字の交じり書きで表記するものである（“漢羅臺文”。“漢羅”と略称）。そのうち、本稿で“漢羅”を用いるのは、まず台湾語の語彙、特に白話音の常用語彙が、現在一般に使用されている漢字で表記できないものが多く、表記しようとすると珍しくて難解な漢字をいろいろと使わざるを得ないからである。また、一つの漢字に意味が異なる複数の発音を対応させたりすることになるなど、様々な問題点があるからである（王育德2002a; 2002b; 2012、洪惟仁1992、盧廣誠2003、本稿4.1節も参照）。なお、本稿の台湾語の例文の後には中国語訳と日本語訳を付ける。出典が教育部（2011）の例文の中国語訳は教育部（2011）に基づくが、それ以外の中国語訳・日本語訳はいずれも筆者による。また、例文の下線も筆者による。

例：我beh先來去矣。（我要先離開了。用於表示告辭。）（私はお先に失礼します。別れを告げる際に用いる。）

B. 動詞。行く・どこかへ向かって行く。一人称あるいは一人称を含んだ場合の動作の意志・願望を表す。（“去、前往。用於表示第一人稱或包含第一人稱的動作意願。”）合音は“lǎi”と読む。

例（1）：咱來去看電影好無？（我們去看電影好不好？）（私たちは映画を見に行かない？）

例（2）：我beh來去逛街。（我要去逛街。）（私はちょっと町をぶらつきに行く。）

C. 動詞。行き来する。人と人が付き合うことを指す。（“來往。指人與人之間的交往互動。”）この用法には合音はない。

例：我佮伊已經真久無來去矣，毋知影伊ê情形。（我和他已經很久沒來往了，不知道他的情況。）（私はもう長い間彼と行き来していないから、彼の状況を知らない。）

以上の三つの意味のうち、Cは「行ったり来たりする」という実際の物理的移動（空間領域）から、「行き来する」という人同士の付き合い（社会的領域）へのメタファー拡張の例であり、容易に理解できる用法である。本稿で問題にしたいのはAとBについてである。なお、この二つの意味を表す“來去”は他の閩南語系諸語にも（陳法今1989）、客家語にもある（教育部2008）[7]が、本稿は台湾語のみを考察の対象とする。

3. 物理的移動を表す“去（khì）”と“來（lâi）”について

3.1. 空間領域における“去（khì）”／“來（lâi）”の概念内容

台湾語の“去（khì）”／“來（lâi）”の基本的意味は、空間領域における物理

[7] 客家語の例として、例えば“廟項有人做戲，遽遽食飽夜來去看戲。”（廟會上有人演戲，快點吃飽晚飯去看戲。）（お祭りで芝居をやるから、早く晩ご飯を済ませて芝居を見に行こう。）がある（教育部2008）。なお、上記中国語訳は教育部（2008）により、日本語訳と例文の下線は筆者による。

的移動である。その概念内容について、まず次の例を見てみよう。

（1）a. 伊beh對東京去北海道。（他要從東京去北海道。）（彼は東京から北海道へ行こうとする。）[8]

b. 伊beh對東京來北海道。（他要從東京來北海道。）（彼は東京から北海道へ来ようとする。）

（1a-b）はいずれも、トラジェクター（彼）が一つ目のランドマーク（東京）から、もう一つのランドマーク（北海道）まで移動しようとすることを述べている[9]。この例において、“去”や“來”は動詞であり、それらによって述べているのはその空間上の物理的移動であって、移動の様態は特定されていない。また、移動の出発点と到着点はそれぞれ言語表現“對東京”（東京から）と“北海道”によって明示、すなわちプロファイル[10]されている。この二つの発話は、移動のプロセス全体（出発点、物理的移動、到着点）がプロファイルされているのである。ただし、以下の（2）～（4）に示されるように、物理的移動を表す“去”や“來”の発話において、出発点か到着点の一方だけがプロファイルされる場合もあるし、どちらもプロファイルされない場合もある。

（2）a. 伊beh去北海道。（他要去北海道。）（彼は北海道へ行こうとする。）

b. 伊beh來北海道。（他要來北海道。）（彼は北海道へ来ようとする。）

（3）a. 伊beh對東京去。（他要從東京去。）（彼は東京から行こうとする。）

b. 伊beh對東京來。（他要從東京來。）（彼は東京から来ようとする。）

（4）a. 伊beh去。（他要去。）（彼は行こうとする。）

b. 伊beh來。（他要來。）（彼は来ようとする。）

ここでもう一度（1）に戻って、“去”“來”の特徴に注目してほしい。（1）において彼が行おうとする物理的移動の方向は、現実世界においてはいずれも同じである。しかし、“去”と“來”とではその移動を観察する発話者の、発話時の発話地点（発話者の「いま･ここ」）における視点の位置（つまり視座）が異なっている。例えば、（1a）の“去”の発話で、発話者の視座は彼の出発点東京（正確には、出発点という一点ではなく、出発点を含

んだ、境界線があいまいな広がりを持った空間領域である探索領域（search domain））にあるのに対し、（1b）の“來”の発話では、発話者の視座は彼の到着点北海道（同様に、正確には、到着点という一点ではなく、到着点を含んだ探索領域）にある。つまり、“去”と“來”は発話者の視座を取り込んで移動を述べるのである。この点について、“去”／“來”の発話と“kàu”（到着する）の発話とを比較したら、いっそう明らかになるだろう。次の（5）を見てみよう。

（5）a. 伊beh對東京騎跤踏車kàu北海道。（他要從東京騎自行車到北海道。）（彼は東京から北海道まで自転車で移動しようとする。）

b. 伊beh對東京騎跤踏車去北海道。（他要從東京騎自行車去北海道。）（彼は東

---

[8] 台湾語の“伊”は三人称単数代名詞で、男性／女性の区別はない。ここでは煩雑さを避けるため、すべて三人称単数の男性に訳す。

[9] トラジェクター（trajector）とランドマーク（landmark）はいずれもLangackerの用語である。両者は（動詞などを使った）関係を示す叙述（relational predication）において関連付けられる二つの参与者である。トラジェクターはこの関係において最も顕著な参与者である。また、ランドマークはトラジェクターの次に顕著な参与者であり、複数存在することがありうる（Langacker 1991: 549, 555、深田・仲本2008: 41-42）。「両者は、図／地の関係から言えばいずれも図であり、その違いは顕著さの違いだけである。典型的な移動事態においては、トラジェクターは移動物、ランドマークはその移動の経路を特定する参照物である」（深田・仲本2008: 41-42）。

[10] プロファイル（profile）はベース（base）と対となる概念であり、いずれもLangackerの用語である。両者は知覚心理学の図と地という概念が基盤となっている。プロファイルは言語表現によって明示された存在のことであり、ベースはその言語表現によって必然的に喚起されるすべての概念内容のことである。あるいは、ベースはそのプロファイルの基盤となっている認知領域だとも言う。例えば、言語使用者が［ARC］という言語表現を明示的に使った場合、その背景となる［CIRCLE］が必然的に喚起される。［CIRCLE］は［ARC］のベースとして機能するのである。一方、［ARC］はそのベースの中で際立ち（prominence）が大きい部分構造であり、叙述（predication）の直接スコープ（immediate scope）の焦点（focal point）として機能する部分である。このことを、「［ARC］をプロファイルする」または「［ARC］がプロファイルである」と、Langackerは言っている（Langacker 1987: 184; 1991: 551、深田・仲本2008: 41、辻2013: 327, 338）。

京から北海道へ自転車で行こうとする。）

c. 伊beh對東京騎跤踏車來北海道。（他要從東京騎自行車來北海道。）（彼は東京から北海道へ自転車で来ようとする。）

（5）はいずれも二つの動詞が使われており、いわゆる連動文という文型である。一つ目の動詞句“騎跤踏車”（自転車に乗る）は移動の様態を示している。二つ目の動詞句はそれぞれ“kàu北海道”（北海道に到着する）、“去北海道”（北海道へ行く）、“來北海道”（北海道へ来る）であり、いずれも北海道が移動の到着点であることを明示している。しかし、“kàu”と“去”“來”とでは発話者の視座が示されているかどうかという点で異なる。（5a）の“kàu”で述べる発話は、その移動を観察する発話者の視座がどこにあるかは不明である。それに対し（5b-c）の“去”や“來”で述べる発話は、その移動を観察する発話者の視座が示されている。すなわち、“去”で述べると、発話者の視座が出発点（を含んだ探索領域の中）に置かれ、そこから離れた場所に位置する到着点へ遠ざかる物理的移動を行うことを表す。一方、“來”で述べると、逆に、発話者の視座が到着点（を含んだ探索領域の中）に置かれ、そこから離れた場所を出発点とし、発話者の視座へ近づく物理的移動を行うことを表す、ということである。つまり、“去”“來”で述べると、発話者の「いま･ここ」における視座が示され、それと物理的移動の遠ざかり／近づきの関係が自ずから決まってくるのである[11]。

以上のことから、空間領域における“去（khì）”“來（lâi）”の概念内容はそれぞれ（6）（7）のようにまとめられよう。両者の違いは（d）のみである。

---

[11] 物理的移動を表す“去”“來”の発話において、発話者の視座を発話者の「いま・ここ」以外の時間・場所に移転する用法もある。たとえば、学校で同級生に対して、“二九暝你敢beh來阮兜圍爐？”（大晦日に私の家に来て年越し鍋を囲みませんか？）という発話において、発話者の視座は「いま・ここ（学校）」ではなく、「大晦日・私の家」にある。このような用法は“去”“來”の典型的用法ではなく、拡張的用法だと考えられる。

（6）空間領域における“去(khì)”の概念内容：

a. 現実世界の空間領域における移動物による物理的移動である。

b. その物理的移動には出発点と到着点があるが、それらは言語表現によってプロファイルされている場合とそうでない場合とがある。

c. その物理的移動を観察する発話者の視座（視点の位置）が示されている。その典型的視座は、発話者の発話時の発話地点（発話者の「いま・ここ」）にある。

d. その物理的移動の方向は発話者の視座から遠ざかる方向である。すなわち発話者の視座が含まれる探索領域（search domain）のどこかを出発点とし、発話者の視座から離れた場所を到着点とする。

（7）空間領域における“來(lâi)”の概念内容：

a. 現実世界の空間領域における移動物による物理的移動である。

b. その物理的移動には出発点と到着点があるが、それらは言語表現によってプロファイルされている場合とそうでない場合とがある。

c. その物理的移動を観察する発話者の視座（視点の位置）が示されている。その典型的視座は、発話者の発話時の発話地点（発話者の「いま・ここ」）にある。

d. その物理的移動の方向は発話者の視座へ近づく方向である。すなわち発話者の視座から離れた場所を出発点とし、発話者の視座が含まれる探索領域のどこかを到着点とする。

以上のことから、台湾語の“去”／“來”の空間領域の概念内容は、中国語／英語／日本語などの言語のイク／クルに通じると言えるだろう。もちろん、基本的概念内容が同じだからと言ってこれらの言語のイク／クルの意味や用法がいずれもすべて同じという訳ではなく、それぞれが多くの拡張事例を持っており、結果的に異なる様相を呈することはある。

例えばよく知られる差異として、誰かに呼ばれた場合、日本語では「行きます」と答えるのに対し、英語では‘I’m coming. / Coming.’と答える、という例がある。この点について、台湾語や中国語はどちらの答え方も可

能である。例えば、以下のようである。

（8）我隨｛去（khì）／過去／來（lâi）｝。（我馬上｛去（qù）／過去／來（lái）｝。）[12]

また、「お家に行ってもいいですか」と聞き手に尋ねる場合、日本語では「行く」しか使えないが、英語では“May I *come* to your house?”のようにCOMEを使うことも[13]、“May I *go* to your house?”のようにGOを使うこともある[14]。同様に、台湾語や中国語でも“去”“來”のどちらも使うことができる（台湾語はさらに“來去”も使う）。例えば、（9）のようである。

（9）我敢會當｛去／來／來去｝恁兜？（我能｛去／來｝你家嗎？）[15]

このような場面においてイク／クルの片方しか選択できない言語は別として[16]、同一の場面において、発話者によってイク／クルのどちらも任意に選択できる台湾語や中国語の場合は、クルを選択するとより聞き手に対

---

[12]（8）の台湾語／中国語の主語はどちらも省略可能。また、台湾語／中国語の“過去”はどちらも「（どこかを通って）行く」という意味を表し、その移動の方向は“去”と同様である。

[13] 例えば、次の用例がある。（発話者が聞き手のオフィスにいる時）“‘Your appointment will be here soon. We have much to talk about. May I *come* to your place tonight?’”（Truth: 206）や、（電話で）“‘Great news,’ Andrew responded. ‘Tim’ll be surprised. May I *come* to your office to discuss the trip?...’”（Stay: 273）など。

[14] 例えば、次の用例がある。“‘May I *go* to your house?’ asked Lizard and they replied affirmatively.”（American: 381）や、“‘May I *go* to your house... and meet your parents?’ I nodded and lowered my head.”（Skin: 234）など。

[15]（9）の台湾語／中国語の主語はどちらも省略可能。中国語の“來”の例として、例えば中国のサーチエンジン百度のニュースで検索したら次のようなものがあった。「肖志勇，我要來你家吃回鍋肉」（錢江晚報2014/2/11、http://qjwb.zjol.com.cn/html/2014-02/11/content_2528650.htm、閲覧日：2015/09/04）や、「可能會存在這次我來你家住，下次你來我家住，而非我來你家住，同時你來我家住的情況。」（陳小蒙2012/6/27/11:30、http://36kr.com/p/122103.html、閲覧日：2015/09/04）など（原文は簡体字で表示されているが、本稿では繁体字に直している）。

[16] 池上（2005）は、誰かに呼ばれた場合、日本語で「行く」と答えるのは〈自己〉対〈他者〉という対立の独話型図式であるとし、一方英語で“I am coming.”と答えるのは〈対話者〉対〈非対話者〉という対立の対話型図式であるとしている（池上2005: 11）。

する親密さを感じるのに対し、イクを選択するとそのような親密さを感じず、より客観的表現だと感じる。それはなぜだろうか。

発話者と聞き手は別々のところにいて、発話者が聞き手のところへ向かって移動することは、つまり発話者の視座から遠ざかることであり、それがイク（“去(khi)”）の概念内容に当たるものである。イクという実際の物理的移動を、イクという言語表現で述べることは、時間の流れに沿って、トラジェクターが位置を連続的に変えていくという物理的移動に対し、その様子を観察する概念主体はそれを追跡して心的走査（mental scanning）を行い、その物理的移動の進行を把握し、認知的処理を行っていくということである（Langacker 1999、辻2013: 163）[17]。

一方、クルで述べると概念主体の心的走査は発話者の視座に近づく走査となる。これは現実世界における移動の方向とは逆であり、一見、両者は矛盾しているのではないかと思われる。しかし実はこの場合においては、発話者が物理的移動を追って心的走査を行う前に、まず視座を移転する操作を行っていると考えられる。すなわち、発話者はまず移動者としての自分と概念主体としての自分とを分離する操作を行い、もともと発話者の発話地点にあった視座を、もう一方の概念主体である聞き手の視座に移す。そのようにして発話者が視座を聞き手の視座に置いてから、現実世界における発話者自身の物理的移動を追跡して心的走査を行う。つまり、実質的に発話者から遠ざかる「イク」の物理的移動を、あえて発話者の視座へ近づくことを示す「クル」で述べるのは、発話者の視座が聞き手の視座になっているからなのである。そして、発話者が視座を聞き手の視座に移転し、いわば聞き手目線で事態を把握し、認知的処理を行うことにより、発話者と聞き手との心的世界の距離が縮み、連帯感、ひいては一体感が生まれ、

---

[17] 概念主体（概念化者conceptualizer）はLangackerの用語で、概念化（事態を一連の認知過程において意味が構築・創造されること）を行う主体（subjects of conception）であり、主要な概念主体は発話者と聞き手であるとしている（Langacker 1999: 297、辻 2013: 29）。

発話者の聞き手に対する親密感をより示すことができるようになるのである[18]。

それに対し、“去”で述べるとそのような親密さが感じられず、“來”で述べるよりも客観的な表現となるのは、そのような視座移転の操作を行っていないからである。

このように、発話者が移動者であり、かつ、聞き手の視座（視点の位置）へ移動する場合、日本語とは異なり、台湾語／中国語／英語ではクルの到着点を聞き手の視座に移転することができる。むろんこれは、クルの（プロトタイプ的用法ではなく）拡張的用法の一つであり、クルの到着点を発話者の「いま・ここ」に置く方が、もとより典型性が高い用法である。

なお、本稿の考察の対象外のため、ここでは詳しく検討しないが、実は、日本語の「行く／来る」で述べても、視座を発話者の「いま・ここ」以外の時間・場所に移転する拡張的用法はある。イク／クルの視座が移転する

---

[18] 台湾語／中国語では、発話者が視座を聞き手の視座に移転する操作を行う例は他にもある。例えば電話で民宿などの部屋を予約するため、「お宅（あなたたちのところ）にまだ部屋がありますか」と尋ねる場合、（ｉ）“恁hia敢猶有房間？（你們那裡還有沒有房間？）”と（ii）“恁tsia敢猶有房間？（你們這裡還有沒有房間？）”という二通りの発話が可能である。「あなたたちのところ」を表すのに、二人称複数形（“恁”／“你們”）の後、（ｉ）では英語のTHEREに相当する“hia”／“那裡”という指示代詞を用い、（ii）ではHEREに相当する“tsia”／“這裡”という指示代詞を用いて場所化している。そして、（ii）のように現実世界におけるTHEREの場所をあえてHEREで述べることにより、発話者の聞き手に対する親密さを示しているのである。なお、本多（2005）も「視座の移動」について述べているが、それは一人称代名詞の言語化と関わる問題である。例えば、Kyoto is approachingのように一人称代名詞が言語化されていない文では視座の移動はないが、We are approaching Kyotoのように一人称代名詞が言語化されている文では視座の移動があると言う（p.34）。これは本稿で言う視座の移転とは異なっている。そもそも（8）（9）の台湾語／中国語や英語のI'm comingの一人称代名詞主語はいずれも省略可能であり、これらの発話において一人称代名詞が言語化されているかどうかに関わらず、もとはイクの移動をクルで述べたり、（ii）のようにTHEREの場所をHEREで述べる限り、視座の移転が生じていると考える。

現象は諸言語で見られる現象であり、ただ、言語によってその条件が異なるに過ぎないのである。

3.2. “去”のプロトタイプ的意味

この節では、台湾語の“去(khì)”のプロトタイプ的意味（典型的意味）を確認し、“去”“來”によって述べる移動の性質をさらに考えたい。

前節で述べたように、“去(khì)”で述べると、発話者の視座（が含まれる探索領域のどこか）を出発点とし、発話者の視座から遠い場所に位置する到着点へ遠ざかる物理的移動を行うことを表す。そこで、移動者が（発話者の視座から）出発することがプロファイルされれば、「出発点から離れる」ことを表すこととなり、逆に移動者が（発話者の視座から遠い場所に位置する）到着点へ向かって物理的移動を行うことがプロファイルされれば、「到着点へ遠ざかる移動を行う」ことを表すこととなる。言い換えれば、「出発点から離れる」ことと、「到着点へ遠ざかる移動を行う」こととは、同じ概念内容をベースとしつつ、両者はただそのプロファイルが異なるだけのことである。どこかへ向かって移動することは、結果的にもとの場所から離れることでもある。そのため、二つの意味が一つの語彙によって表されるのは自然なことであり、実際さまざまな言語のイクはこの二種類の意味を表せる。例えば、日本語の「行く」や英語の“go”、さらに「行こう」や“Let’s go!”という発話もこの二種類の意味を表せる。

ところが、単にその場から離れようとする時に言う「行こう！」（Let’s go!）を台湾語に訳す場合、以下の（10a-b）のように“行”（歩く）や“來去”では述べるが、（10c）のように“去”で述べることはない（なお、（10）では日本語と同じように、一人称主語は省略可能である）。

（10）単にその場から離れようとする時に言う「行こう！」（“Let’s go!”）

a. 咱行！（咱們走！）

b. 咱來去！（咱們走！）

c. ?咱去(khì)！（?咱們去(qù)！）

“去（khì）”だけで述べると、どうしても到着点が心的に喚起され、そちらへ向かって移動することを表すことになり、単に「出発点から離れる」という意味にとどまらなくなってしまうのである。また、（10）の中国語訳からも分かるように、中国語でもこの場合は“走”（歩く）で述べる。“去（qù）”で述べるとやはり到着点が心的に喚起されてしまうのである。実は、台湾語／中国語において“去”で述べる際、「出発点から離れる」ことがプロファイルされる例は非常に限られている。それは例えば（11）（12b）のようなものである[19]。

（11）a. 有去無回。（有去無回。）（行ったきり帰って来ない。）（教育部2011）

b. 去真久矣。（去很久了。）（長い間行ったきりだ。）（盧廣誠2011: 226）[20]

c.［中国語のみ］去（qù）！（行け！）

d. 伊對名古屋去。（他從名古屋去。）（彼は名古屋から行く。）

（11a）は移動物やそれに見立てたものが離れてしまう／消えてしまうことを言う慣用句である。（11b）は離れた後長い時間が経ったことを表している。（11c）は中国語の“去（qù）”のみの用法であり、筆者の知る限り台湾語の“去（khì）”にこの用法はないが、誰かに目の前から離れて欲しくて追い払う時に使う命令文である。この三つの例の“去（khì/qù）”では、到着点があまり意識されていないと言えるだろう。では、（11d）はどうだろうか。この例においては出発点を言語表現で明示することにより、「名古屋

---

[19]「離れる」ことを表す台湾語の“去（khì）”の例として他には例えば、董忠司ほか（2010）では“一去無消息。”（行ったきり全く消息がない。）、盧廣誠（2011）では“一去無回頭。”（行ったきり戻らない）を挙げており、いずれも教育部（2011）の例に類似している。陳修（2000）では純粋に空間上の物理的に離れる意味を表す例を挙げておらず、“去世”（世を去る・逝去する）、“去就”（職を拒絶することと受け入れること）などいくつの例を挙げている。なお、“去世”は（12b）の“去”同様、「死ぬ」の婉曲表現であるが、到着点が意識されずに出発点（世）を離れることがプロファイルされている。“去就”の“去”は「その場所から離れる」という実際の物理的移動（空間領域）から、「辞職する」（社会的領域）へのメタファー拡張の例である。

[20] 盧廣誠（2011: 226）自身の中国語訳は“離開很久了。”（離れて久しい。）である。

から離れる」ことをプロファイルしている。一方、到着点は言語化されてはいないが、やはり意識されており、すなわち心的に喚起されている。

次に、（12）を見てみよう。

（12）a. 伺阿公死矣。（他爺爺死了。）（彼のおじいさんは死んだ。）

b. 伺阿公去矣。（他爺爺去了。）（彼のおじいさんは行った。）

死に対しては直接的表現が忌まれることが多く、さまざまな婉曲な代替表現が使われるが、（12b）“去”も（12a）“死”の婉曲表現の一つである。この“去”は（魂の存在を信じない発話者ならば隠喩的であろうが）「死ぬ」すなわち「この世を離れる」の代わりに使うため、「出発点から離れる」ことがプロファイルされていると言えるだろう。しかし「死ぬ」を直接口にしないこと以外に、（12b）が（12a）より婉曲的である理由がもう一つある。それは、“去”を使うと、何らかの目的地へ向かって移動することがイメージされるからであり、死んだのではなくあの世へ行っただけのことだと理解し解釈しうるからである。つまり、“去”という移動の概念における到着点の存在を意識することにより、婉曲度が強化されるのである。次に、例をもう一つ観察しよう。

（13）伊對名古屋去臺北矣。（他從名古屋去臺北了。）（彼は名古屋から台北へ行った。）

（13）において、出発点と到着点はそれぞれ“對名古屋”（名古屋から）と“臺北”（台北（へ））という二つの言語表現によって明示されている。そのうち、到着点“臺北”が無標であるのに対し、出発点“名古屋”は介詞（前置詞）“對”（～から）を付けて有標化しなければならない。言語表現と知覚・経験の関係において一次的要素が無標であるのに対し、二次的要素が有標となる傾向が見られる[21]。その意味でも、“去”の移動は、出発

[21] この点でアフォーダンス（affordance）理論が思い出される。アフォーダンス理論によると、モノの使用法と言語表現の関係について、「行為をアフォードしないものを標示するときは、行為をアフォードするものを標示するときに比して、より有標（有徴）の形式が必要とされる」と言う（辻2013: 3）。例えば、日本語では「椅子に座る」と言うが、「?椅子に立つ」とは言わずに「椅子の上に立つ」

点よりも到着点がより重要な要素となっていると言える。それは、“去”の移動は到着点が存在するからこそ意味があるため、到着点への志向性が強い移動だからなのではないかと考えられる[22]。また、ここでは議論しないが、“來”の移動にも同じことが言えるだろう。

この節の話をまとめよう。台湾語の“去(khì)”の空間領域における概念内容は、発話者の視座（が含まれる探索領域のどこか）を出発点とし、発話者の視座から遠い場所に位置する到着点へ遠ざかる物理的移動を行うことである。そのプロファイルにより、「出発点から離れる」と、「到着点へ遠ざかる物理的移動を行う」という二つの意味が一つの語彙によって表されうる。しかし実際のところ、台湾語の“去(khì)”で述べると、何かの条件で特に出発点をプロファイルしない限り、出発することよりも、到着点へ向かって移動する意味がより現れやすい。また、たとえ出発点がプロファイルされたとしても、通常到着点もともに心的に喚起されることになる。したがって、「出発点から離れる」という意味よりも「到着点へ遠ざかる物理的移動を行う」という意味の方が台湾語の“去(khì)”のプロトタ

と言わなければならない。このように格標識に変化が生じるのは、「椅子」が「座る」行為をアフォードするように作られているのに対し、「立つ」行為をアフォードしないからであるとしている（辻2013: 3）。この点について、本多（2013）は荒川（1992）の例文を引用しつつ、モノに関する「可能な行為」を「単に可能なだけの行為」と「そのモノにふさわしい行為」とに分ける。椅子について言えば、「立つ」行為は前者であり、「座る」行為は後者である、と言う（pp.112-119）。ただし、このことは必ずしもすべての言語のあらゆる現象を説明できるとは限らない。例えば、中国語では「椅子の上に立つ」を“站在椅子上”と言い、「椅子に座る」を“坐在椅子上”と言うように両者を区別していない。しかし言語表現の中で、経験者の知覚・経験上において一次的要素が無標であるのに対し、二次的要素が有標となる傾向はあると言えよう。

[22] 日本語の「行く」や英語の“go”の移動も到着点が存在するからこそ意味がある概念であり、台湾語の“去(khì)”／中国語の“去(qù)”と同様、やはり「到着点へ遠ざかる移動を行う」ことが心的に喚起されやすいと考えられる。しかし一方では、「行く」や“go”は「出発点から離れる」意味が台湾語／中国語より現れやすい。この点についての考察は今後の課題としたい。

イプ的意味だと言える。同じことは、中国語の“去(qù)”についても言える。

なお、この節では台湾語の“來(lâi)”／中国語の“來(lái)”については議論していないが、“去(khì/qù)”と同様に到着点への志向性が強いと考える。つまり、“來(lâi/lái)”も「(発話者の視座から遠い場所に位置する）出発点から離れる」と「(発話者の視座が含まれる探索領域のどこかに位置する）到着点へ近づく物理的移動を行う」という二つの移動的意味のうち、やはり後者の方がプロトタイプ的意味であることが考えられる。

4.「出発点（ここ）から離れる」ことを表す“來去”について

２節で掲げた教育部（2011）によれば、“來去(lâi-khì)”にはA「ここから離れる」と、B「どこかへ向かって行く」という意味がある。しかし３節で述べたように、空間領域における“去”の概念内容は、発話者の視座(が含まれる探索領域のどこか）を出発点とし、そこから離れた場所に位置する到着点へ遠ざかる物理的移動を行うことである。つまり、そのプロファイル上、台湾語“去(khì)”だけで「出発点から離れる」と、「到着点へ向かって移動する」という二つの意味が表せるはずである。そうであるならば、“來去”のA／B二つの意味を表すのに、“去”だけで事足りるはずである。では、なぜ“去”の前にわざわざ“來(lâi)”を付けるのだろうか。念のために言うが、“來去”は日本語の「行って来る」、あるいはその逆の「来てから行く」というような意味を表さない。“來去”の“來”の部分はいかなる物理的移動も表さないのである。

この“來”の役割を明らかにするために、まずこの第４節では「出発点（ここ）から離れる」という意味を通して“來去”の特徴を見てみたい。

この台湾語の“來去”の特徴として、次の三点が見られる。（Ⅰ）“去(khì)”単独の場合よりも「出発点から離れる」という意味が極めてプロファイルされやすい点。（Ⅱ）近未来アスペクトの発話に現れる点。（Ⅲ）勧誘・意志・命令・依頼などの発話で使われる点。以下、この三点につい

て検討していきたい。

4.1. （Ⅰ）“去(khì)”単独の場合よりも「出発点から離れる」がプロファイルされやすい点

3.2節で述べたように、“去(khì)”は「出発点から離れる」ことがプロファイルされることが少なく、たとえプロファイルされたとしても、多くの場合到着点が心的に喚起される。つまり、単に「出発点から離れる」ことだけを表すことが非常に少ないのである。それに対し、“來去”においては、到着点が意識されずに「出発点から離れる」ことがプロファイルされやすく、しかもその意味での使用頻度が非常に高い[23]。使用頻度が高いことに由来する現象として、この“來去(lâi-khì)”には“laih”という短縮形があることが挙げられる。例えば、(14a)は(14b)のようになる。

(14) a. 我beh先lâi-khì矣。(我要先離開了。用於表示告辭。)(私はお先に失礼します。別れを告げる際に用いる。)(教育部2011)

b. 我beh先laih矣。(我要先離開了。)(お先に失礼します。)

台湾語は声調言語である。“來(lâi)”の発音は本来は第５声であるが、“來去(lâi-khì)”のように、その後に音節が続く場合は前の音節の第５声が第７声あるいは第３声に変調(tone sandhi)される(７声になるか３声になるかは地域差、世代差、個人差、および語彙の違いによる)[24]。一方、短縮形“laih”は第４声である。

“來去(lâi-khì)”と“laih”との関係について、教育部(2011)や盧廣誠(2003; 2011)では、後者は前者の“合音”(音声融合)であるとしている。一方、陳修(2000)は“來去(lâi-khì)”と“laih”をそれぞれ別々の項目と

---

[23] “來去”のA「出発点(ここ)から離れる」という意味がプロファイルされやすいからといって、B「どこかへ向かって行く」という意味がプロファイルされにくいというわけではない。後者については次稿で述べる予定である。

[24] 台湾語の音節では、最後の音節や軽声の直前以外は基本的に変調(声調交代)が行われる(鄭良偉1997、王育德2002a; 2002b、盧廣誠2003、教育部2011など)。

して挙げ、後者を前者の“合音”だとは言っていない。果たして“laih”が“lâi-khì”の“合音”と言えるかどうかはまだ研究の余地があるだろう。この点は、英語の近未来アスペクトbe going toからbe gonnaへの変化が示唆を与えてくれる。すなわち、be gonnaへの変化は、Hopper & Traugott（2003）では再分析（reanalysis）が起こった結果であるとし、かぎカッコのくくり方が［I am going［to marry Bill］］から［I［am going to］marry Bill］に変わることにより、-ingとtoの間に句の境界線がなくなり、三つの形態素go-ing toから一つの形態素gonnaへと変化したのだ、と言う（p.3）。これは音声融合が生じたことによって起きた変化なのではないかと思われる。

しかし“lâi-khì”と“laih”とには以上のような音声融合の関係は見られず、音声融合というよりも、“khì”という音節の脱落（loss）と“lâi”という音節に声門閉鎖音が加わる、すなわち一種の喉頭化（glottalization）が起きている。

まず、“khì”という音節の脱落、つまり一種の音声減少（phonological reduction）の現象が起きたのは、この表現の使用頻度が非常に高いからほかならない。使用頻度が高い一例として、第２節で掲げた教育部（2011）がこの“來去”の例文（＝例文（14a））について「別れを告げる際に用いる」と説明しているように、この“來去”はしばしば「（お先に）失礼します」の意味で使われることがあり、言い換えれば「さよなら」の代わりに使われることがある。実際、台湾語では「さよなら」に相当する漢語由来の言葉“再會”はあるが、それは通常、ラジオ番組･テレビ番組やコンサートなどのフォーマルな場合で使われており、普段会った相手と別れる時に日常の口語ではしばしば“我lâi-khì！（（先に）行く（ね／よ）！）”あるいは“我laih！”（（先に）行く（ね／よ）！）と言うのである。そのような場合、“來去”で述べると、次に向かう到着点を意識せずに単に発話者の発話時における発話地点から出発する、つまり教育部（2011）が言う「ここから離れる」という意味を表すことになるのである。ただし、この“來去”で述べた発話の出発点が「ここ（発話地点）」ではない例もたまに見られ

る。たとえば“我後禮拜對伓兜來去。”（私は来週彼の家から出発する。）という例において、出発点は「彼の家」であり、「ここ（発話地点）」ではない。したがって、本稿では“來去”のこの意味を、より包括的な「出発点から離れる」としている。

次に、“lâi”という音節に声門閉鎖音が加わることについてだが、台湾語の入声/h/は実は声門閉鎖音（glottal stop、IPA記号は［ʔ］）であり、“lâi”から“laih”への変化は声門閉鎖音が加わる変化である。これは、喉頭の緊張を伴い、調音位置が喉頭化する変化の一種である。この変化が起きた理由については、以下の（i）から（iii）の三点が考えられる。

（i）声門閉鎖音［ʔ］は声止めの仕方の一種である。城生ほか（2011）によると、声止め（発話の終了部分における声の止め方）には二種類あると言う。まず「ごく自然に、だらだらと呼気圧、声帯振動などが減少していって、いつしか聞こえなくなるような終わり方を「自然減衰」という。これに対して、息張るようにして意図的に声を切れよく遮断する場合、声門は短時間にぎゅっと閉じられる。このようにして作られた言語音を声門閉鎖音（glottal stop）という」（pp.71-72）。台湾語の“lâi-khì”は「出発点から離れる」という意味を表す際、（その後に語気助詞／終助詞が続くこともあるが、それを除いた場合）発話の終了部分に置かれる。そして“lâi-khì”の“khì”が脱落すると、発話の終了部分に置かれるのは“lâi”となり、換言すれば“lâi”で発話を終えることとなる。その際、“lâi”ではなく“laih”と発音するのは、上述の二種類の声止めのうち、自然減衰ではなく、声門閉鎖音が選択されている、ということである。

（ii）“laih”への変化は発話の終了部分における“lâi”と区別するためである。実は、“lâi”を発話の終了部分に置くと常に声門閉鎖音“laih”という声止めが選択されるのではなく、むしろ自然減衰、すなわち“lâi”という発音のままで声止めすることが多い。たとえば、「来る」という“來（lâi）”のプロトタイプ的意味や、“來（lâi）”のさまざまな拡張的意味を表す場合は、“lâi”のままで声止めする。一方、“lâi”に声門閉鎖音が加わり“laih”

に変化するのは、（“lâi-khì”の一つの意味である）「出発点から離れる」という意味を表す場合のみである。“lâi”と“laih”を漢字で充てるとどちらも“來”となってしまうが、両者は音韻構造（phonological structure）のみならず、意味構造（semantic structure）も異なるため、実は別々のゲシュタルト（Gestalt / configuration）、すなわち別々の慣習的な言語単位として知覚し記憶しているのである。このことから、“laih”の入声/h/[ʔ]は、“lâi”と意味を区別するための弁別素性（distinctive feature）だと言える。

では、「出発点から離れる」という意味を表す場合、“lâi”が“laih”に変化するのは、なぜだろうか。この点は“laih”が使われる発話のタイプと関係があると思われる。それを次の（iii）で述べる。

（iii）“lâi”が“laih”に変化するのは聞き手に対して働きかけたり注意喚起するためである。4.3節で後述するが、「出発点から離れる」という意味の“lâi-khì”は、意志・勧誘・命令・依頼などの発話でのみ使われる。実は、その短縮形“laih”も同じタイプの発話でのみ使われる。それらの発話のうち、（「出発点から離れる」という意味の“lâi-khì”の勧誘・命令・依頼などの発話と同様に）“laih”の勧誘・命令・依頼などの発話は、発話者が聞き手あるいは第三者と一緒にその場から離れるよう、聞き手に働きかけるためである。また、（「出発点から離れる」という意味の“lâi-khì”の意志の発話と同様に）“laih”の意志の発話は、通常独り言の時ではなく、多くの場合発話者がその場から離れようとすることを（例えば「さよなら」の代わりに）「（先に）行く（ね／よ）」、「（お先に）失礼します」などと聞き手に伝達し聞かせるためであり、これは聞き手に対する一種の注意喚起だと言える（4.3節参照）。ということは、（「出発点から離れる」という意味の“lâi-khì”と同様に）“laih”で述べる時には、聞き手に働きかけたり注意を喚起するため、という目的を伴う。そこで、自然減衰のような「いつしか聞こえなくなるような」声止めよりも、声門閉鎖音を用いて喉頭を緊張させて「声を切れよく遮断する」声止めをした方が、その発話に勢いを付けることができ、それらの発話の目的を達成するためにより効果的なの

ではないかと思われる。

以上の三点が、“lâi”という音節に声門閉鎖音が加わり“laih”へと変化した理由だと考えられる。

ただし、台湾語の声門閉鎖音には第４声の他に第８声もある。しかし第８声ではなく第４声に変化するのは、第５声（上昇調、陽平声）の変調後の声調である第７声（中平調、陽去声）あるいは第３声（低下降調、陰去声）の音調が、第８声（高短調、陽入声）よりも、第４声（中短調、陰入声）に近いからだと考えられる。

以上のように、“lâi-khì”が「出発点から離れる」という意味を表す場合、“laih”という短縮形が存在する。それは、“來去”の「出発点から離れる」という意味での使用が日常生活において極めて多いため、まとまった一つの慣習的な言語単位、言い換えればゲシュタルトとして知覚し認識されているからこそである。このことから分かるように、前述の“去(khì)”のみの場合とは異なり、“來去”という表現は、到着点が意識されずに「出発点から離れる」という意味が極めてプロファイルされやすいのである。

4.2.（Ⅱ）近未来アスペクトの発話に現れる点

では、「出発点から離れる」という意味の“來去”が現れる発話は、テンスやアスペクトにおいて何か制限を受けるだろうか。この点について、まず次の例文を見てみる。

（15）a.* 伊頭拄仔tō<u>來去</u>矣。

b. 伊頭拄仔tō<u>去</u>矣。（他剛才就去了。）（彼はさっきもう行った。）

c. 伊頭拄仔tō<u>走</u>矣。（他剛才就走了。）（彼はさっきもう行ってしまった。）

（15）では“頭拄仔”（先ほど）によって、発話時にはその事態がすでに実現されたことを表している。これらの発話では、“去”や「離れる」ことを表すもう一つの動詞“走”なら問題なく使えるのに対し、“來去”は使えない。このことから明らかなように、その移動がすでに実現済みの場合には、“來去”が使えないのである。“來去”が使えるのは例えば（16）のよ

うな発話である。

（16）a. 我來去。（我走了。）（私は行く。）

b. 我明仔載tō來去。（我明天就走。）（私は明日にも行く。）

（16a）の基準時は発話時であり、（16b）の基準時は未来（あした）である。この二例において「離れる」ことを実行するのは、いずれも基準時より少し未来であるため、“來去”は問題なく使えるのである。盧廣誠（2011）でも、“來去”の時間は必ず現在や未来でなければならないとしている（p.253）。しかし実は、“來去”の時間が過去になることもある。この点について（17）を見てみる。（17a-d）は一続きの会話文である。

（17）a. 阿明：“啊阿雄leh？”

b. 阿珠：“伊頭拄仔tō講伊beh來去矣，無定著已經走矣喔。”

c. 阿明：（拍手機仔）“阿雄仔，你khah做你走啦？”

d. 阿雄：（拍手機仔）“我頭拄仔tō講我beh來去矣，啊tō毋知影你leh趖啥，我tō先走矣啦。”

（a. 阿明：“阿雄呢？”／b. 阿珠：“他剛才就說他要走了，說不定已經走了喔。”／c. 阿明：（打手機）“阿雄，你怎麼只管自己走了呢？”／d. 阿雄：（打手機）“我剛才就說我要走了啊，也不知道你在拖什麼，我就先走了啊。”）

（a. 明くん：「雄くんは？」／b. 珠ちゃん：「彼はさっきもう行くって言ってたから、もう行ってしまったかもよ」／c. 明くん：（携帯電話で）「雄くん、なんで一人で勝手に行っちゃったの?」／d. 雄くん：（携帯電話で）「さっきもう行くって言ったよ、君が何をぐずぐずしてたか分からなかったんで、一人で出てきたんだ。」）

（17）において、“來去”が使われているのは（17b）と（17d）のそれぞれの発話の一つ目の節（“分句”）であり、どちらも過去の雄くんの発話を間接話法で引用して述べた発話である。この二つの節において、“來去”によって指し示した「（雄くんが）離れること」は、いずれも過去に起きていた。これらの“來去”で述べているのは、その過去の基準時の直後に、その場所から離れようとした移動者雄くんの意志なのである。

以上のことから、「出発点から離れる」という意味の“來去”が現れる発

話の時間は現在／未来／過去のいずれも可能であり、テンス的制限は特にないことが分かった。また、いずれのテンスにおいても「出発点から離れる」ことは、アスペクト的には基準時に実現済みの場合は使えず、基準時より近未来に行われることを表すこと、すなわち近未来アスペクトというアスペクト的な制限があることが分かった。

4.3.（Ⅲ）勧誘・意志・命令・依頼などの発話で使われる点

前節では、「出発点から離れる」ことを表す“來去”は、近未来アスペクトの発話にしか現れないことを述べた。しかし実は、たとえ近未来アスペクトの発話であってもこの“來去”が使えない場合も多い。例えば、（18）において“來去”を使うと不自然になる。

（18）a. 電車teh-beh｛*來去／離站｝矣喔。（電車快要出站了喔。）（電車はもうすぐ駅を出るよ。）

b. 氣候轉涼矣，南路鷹liâm-mi teh-beh對宮古島｛*來去／離開｝矣。（氣候轉涼了，灰面鵟鷹馬上就要從宮古島離開了。）（気候が涼しくなったので、サシバはもうすぐ宮古島から離れる。）

c. 無的確仔hia--ê人今仔日tō會對tsit ê所在｛？來去／離開｝矣。（說不定那些人今天就會從這個地方離開了。）（あの人たちは今日にもこの地から離れるかもしれない。）

これらの例文では“teh-beh”“liâm-mi teh-beh”“tō會”などによって、離れることが「もうすぐ」（近未来に）起こることを表している。しかしいずれも“來去”が使えない。それは、（18a）は電車の発車、（18b）は渡り鳥の移動、（18c）は第三者の行動について、予測し述べているからである。

実は“來去”が使われる発話は非常に限定的で、勧誘・意志・命令・依頼などの発話でのみ使われるのである。この点についてまず（19）の勧誘の発話、（20）の意志の発話を見てみる。これらの発話においては、いずれの主語も移動者である。また、それらは一人称のため、明示されないことも多い。

（19）a. 行，來去！（走，走吧！）（行こう、行こう！）

b. 咱緊來去，毋通佇tsia koh延時間啦。（咱們快走吧，不能在這兒耽誤時間了。）（私たちは早く行こう、もうこれ以上ここで時間を無駄にしたらだめだ。）

（20）a. 我liâm-mi teh-beh來去矣。（我馬上就要走了。）（私はもうすぐ行くよ。）

b. 歹勢neh，阮先來去honnh。（不好意思呀，我們先走了啊。）（すみませんね、私たちはお先に失礼しますね。）

勧誘の発話において、主語は聞き手を含む一人称複数（“咱”）であり、“來去”で述べることにより、「出発点（ここ）から離れる」という行為を発話者とともに引き起こすよう、聞き手に働きかけているのである。また、意志の発話において、主語は一人称単数（“我”）か、聞き手を含まない一人称複数（“阮”）であり、“來去”の前にしばしば“beh”を置く。“beh”は意志や近未来などの意味を表し、中国語の能願動詞“要”の一部分の意味と重なる。意志を持つ移動者の動作に“beh”を使うことにより、意志の意味がより明確になる。また、“來去”の意志の発話において留意すべきは、それらの発話は通常独り言として使われず、移動者がその場から離れようとする自らの意志や決心を聞き手に知らせたり聞かせたりするためである、という点である。このような“來去”は「さよなら」の代わりに、「（お先に）失礼します」として使われることもしばしばで、それは聞き手に対する一種の注意喚起だと言える。

盧廣誠（2011）では、“來去”の主語は必ず一人称であるかあるいは一人称を含む、としている（p.253）。しかし実は、二・三人称主語の発話でも“來去”が使える。この場合、意志と勧誘の他に、命令・依頼などの発話にも現れる。まず、二・三人称主語の意志の発話を見てみる。

（21）a. 你若是講你beh來去，我tō無共你留。（你如果說你要走，我就不留你。）（あなたが行くって言うなら、引き止めない。）

b. 阿珠：“伊頭拄仔tō講伊beh來去矣，無定著已經走矣喔。”（阿珠：“他剛才就說他要走了，說不定已經走了喔。”）（珠ちゃん：「彼はさっきもう行くって言ってたから、もう行ってしまったかもよ」）（前掲（17b））

（21a-b）の前半の“來去”の発話はどちらも間接話法の発話であり、それぞれの発話で引用されているのは、（21a）では二人称の指示対象「あなた」の離れようとする〈意志〉であり、（21b）では三人称の指示対象「彼」の離れようとする〈意志〉である。一方、どちらも「彼が離れること」を述べるのに、（21b）の後半は“來去”を使わずに“走”を使っている。それは、後半の発話で述べているのが、彼の過去の移動に対する発話者の判断であり、その移動を引き起こそうとする意志や勧誘などではないため、“來去”が使えないからである。また、（21a-b）の例においては“來去”の発話の主語は移動者でもあるが、ただし主語と移動者が一致しない場合もある。例えば、次の（22）の使役文がそうである。

（22）a. 恁若叫我<u>來去</u>，我tō綴恁來去。（你們如果叫我一起走，我就跟你們走。）（もしあなたたちが私に一緒に行こうと言ったら、私はあなたたちに付いて行く。）

b. 伊tō看伊佇tsia氣phu̍t-phu̍t，tō叫伊做陣<u>來去</u>。（他們看他在這裡氣呼呼的，就叫他一起走。）（彼らは彼がここでプンプンしているのを見て、一緒に行こうと誘った。）

（22a）の一つ目の節（“分句”）の主語は「あなたたち」であり、移動者「私」に対して〈命令〉･〈勧誘〉をする発話が仮定的に言及されている。また、（22b）の主語は「彼ら」であり、移動者「彼」に対して〈命令〉・〈勧誘〉をした発話に言及している。〈命令〉と〈勧誘〉の違いは強制力の違いによるものであるが、ここでの両者の違いは言語表現によって明示されるものではなく、発話者の言い方・表情や聞き手の受け止め方などの文脈によって理解し解釈されるものであり、両者は連続的でその境界はあいまいであり、どちらにも解釈されることがある。

また、“來去”の二･三人称主語の発話は間接話法や使役文などにとどまらない。例えば、次の二例における“來去”と“走”の比較は実に興味深い。

（23）a. 你beh<u>走</u>無？（你要不要走？）（あなたは行く？）

b. 你beh來去無？（你要不要和我一起走？）（あなたは私と一緒に行く？）

（24）a. 伊beh走啦。（他要走了啊。）（彼は行ってしまうのよ。）

b. 伊beh來去啦。（他要和我一起走啊。）（彼は私と一緒に行くのよ。）

これらの例の主語は二人称や三人称であり（二人称の場合、主語が省略できることが多い）、意志を表す“beh”を使って主語（＝移動者）の意志を明示している。そのうち、（a）のような“走”の発話は、発話者が聞き手を誘って「私と一緒に」離れようという場合にも使えるが、発話者が離れる予定がない場合や、発話者と聞き手が別々に離れる場合にも使える。つまり、（a）の“走”の発話は、単に主語（＝移動者）に離れる〈意志〉があるかどうかを質問・確認したり、主語（＝移動者）の離れる〈意志〉を発話者が代わりに述べたりする発話である。

ここで注目してほしいのは（b）の“來去”の発話である。（b）においては、必然的に「私と一緒に離れる」という意味で理解し解釈される。つまり、二・三人称主語（＝移動者）の離れる〈意志〉を質問・確認したり、代わりに述べたりする発話でありながらも、発話者からの〈勧誘〉の発話でもあり、これは〈意志〉と〈勧誘〉の中間事例だと言える。

次に、意志を明示する“beh”を使っていない二･三人称主語の発話を見てみる。

（25）a. 你走啦。（你走啦。）（あなたはあちらに行きなさいよ。）

b. 你來去啦。（你和我一起走啦。）（あなたは私と一緒に行こうよ。）

この例でも、“走”“來去”ともに「離れる」を表すが、（25a）は聞き手を発話者の所在地から追い払おうとする発話であるのに対し、（25b）は聞き手に対して発話者が一緒にその場から離れようという〈命令〉･〈勧誘〉の発話であり、両者は対照的である。

次に、三人称主語の“來去”の発話を見てみる。

（26）a. 伊來去啦。（他和我一起走啦。）（彼は私と一緒に行こうよ。）

b. 伊｛mā / 做陣 / 鬥陣 / 做伙｝來去啦。（他｛也 / 一起｝（和我一起）走啦。）（彼｛も / は一緒に｝（私と一緒に）行こうよ。）

（26a）は一見不自然に思われるが、この発話が述べられる場面は二種類考えられる。一つは、「彼」の実質的な役割が聞き手となるような場面である。例えば、発話現場にいるのは、発話者と聞き手以外に、もう一人の人間「彼」がその場にいるとする。発話者は主に聞き手と対話しているため、「彼」を三人称で指示する。しかし、「彼」は直接（26a）の発話を耳にし、かつ自分で意思決定できる。この際、（26a）を発話した時点には、「彼」も聞き手となっている。このような場合の（26a）は、前掲の（25b）と同じ意味を表し、〈命令〉・〈勧誘〉の発話として解釈される。

もう一つの場面は、「彼」が直接その発話を耳にしなかったり、あるいは直接その発話を耳にしても自分で意思決定できない／しない場合である。この場面の（26a）は、「彼」を〈勧誘〉して行動をともにしたいということを、「彼」本人に直接伝えるのではなく、聞き手を通して「彼」に伝えてほしかったり、聞き手に許可してほしかったりする〈依頼〉の発話として使われている。つまりこの際、この発話は〈勧誘〉・〈依頼〉の発話として解釈されるのである。

なお、（26b）は三人称単数主語の例であるが、実は主語（もしくは移動者）の人称にかかわらず、“來去”の発話はしばしばこの例文のように「も」（“mā”）や「一緒に」（“做陣”“鬥陣”“做伙”）の意味を表す言葉と共起し、それにより主語（もしくは移動者）が発話者と同じ移動を行うことを明示するのである。

以上に見てきたように、「出発点から離れる」という意味の“來去”は〈勧誘〉〈意志〉〈命令〉〈依頼〉などの発話に現れる。“來去”の、（Ⅰ）（“去”単独の場合に比べて）「出発点から離れる」という意味が極めてプロファイルされやすい点、（Ⅱ）近未来アスペクトの発話に現れる点、という二点の特徴も、実はそれに由来すると考えられる。前述のように、この“來去”の〈勧誘〉の発話は、発話者とともにその場から離れることを、聞き手に働きかけるためである。実はこの“來去”の〈命令〉〈依頼〉の発話も〈勧誘〉の発話に類似しており、同じ移動をともに引き起こそうと、聞

き手に要求したり、聞き手に許可を求めたり、聞き手から第三者へ伝達するよう依頼したりしており、いずれも同様に聞き手に対して働きかけるためである。また、この“來去”の〈意志〉の発話はその場から離れるという発話者の意志を述べると同時に、聞き手に知らせて注意喚起するためである。そのいずれの発話もその行為（移動）が実行される前に述べられる。だからこそ、その行為はいずれも基準時より近未来になるのである。

またその行為が、どこかへ向かって移動するという行為であるため、その行為の始めの局面、すなわち発話地点から出発しよう、ここから離れよう、という意味も現れやすくなるのではないかと考えられる。これが、“來去”が“去(khì)”単独の場合よりも、「出発点から離れる」という意味がプロファイルされやすい理由だと考えられる。なお、3.2節で見たように、中国語の“去(qù)”は（台湾語の“去(khì)”と同様に）離れる意味は基本的にプロファイルされにくいが、しかし前掲（11c）の“去(qù)！”（行け！）のように命令文として使うと、離れる意味がプロファイルされやすくなる。それも同様な理由によるだろう。

では、〈勧誘〉〈意志〉〈命令〉〈依頼〉などの発話のうち、「出発点から離れる」という意味の“來去”が現れる発話のプロトタイプは何だろうか。ここで、この“來去”が現れる発話をもう一度振り返ってほしい。この“來去”は、確かに（20）（21）のように〈意志〉の発話にも現れる。しかしより多くの場合は、〈勧誘〉の発話に現れる。例えば、（19）は〈勧誘〉の典型事例であり、（22）（25b）は〈勧誘〉と〈命令〉の中間事例であり、（23b）（24b）は〈勧誘〉と〈意志〉の中間事例であり、（26）は発話場面によって〈勧誘〉と〈命令〉の中間事例だったり、〈勧誘〉と〈依頼〉の中間事例だったりする。このことから、「出発点から離れる」という意味の“來去”の発話のプロトタイプ（典型）は〈勧誘〉の発話だと言える。そして、“來去”の〈意志〉〈命令〉〈依頼〉などの発話は〈勧誘〉の発話の拡張事例だと考えられる。つまり、この“來去”という表現のプロトタイプ的意味（典型的意味）は〈「出発点から離れる」という物理的移動の勧誘〉と言え

るだろう。

では、“去”とは異なり、“來去”で述べる発話が〈勧誘〉、それから〈意志〉〈命令〉〈依頼〉の発話になるのは、なぜだろうか。それは、“來去”の“來”の概念操作に由来するものだと考えられる。次稿では、この点について論じたい。

【参考文献】

Hopper, Paul J. & Traugott, Elizabeth Closs. 2003[2] [1993]. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. 1, *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. 2, *Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.

荒川清秀1992.「日本語名詞のトコロ（空間）性：中国語との関連で」『日本語と中国語の対照研究論文集（上）』大河内康憲（編），東京：くろしお出版，pp.71-94.

池上嘉彦2005.「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標（2）」『認知言語学論考No.4, 2004』山梨正明他（編），東京：ひつじ書房, 2005, pp.1-60.

王育德2002a.『台灣語常用語彙』陳恆嘉・黃國彥（譯），臺北：前衛出版社。

王育德2002b.『閩音系研究』許極燉（監譯），何欣泰（譯），臺北：前衛出版社。

王育德2012.『王育德の台湾語講座』東京：東方書店。

邱德修2009.『臺灣語典考證』臺北：台灣書房。

教育部2008.『臺灣客家語常用詞辭典』中華民國97年5月學術網路初版，2011/7/27更新，http://hakka.dict.edu.tw/hakkadict/index.htm，臺北：教育部國語推行委員會。（閲覧日：2015/09/06）

教育部2011.『臺灣閩南語常用詞辭典』中華民國100年7月臺灣學術網路正式版，http://twblg.dict.edu.tw/holodict_new/index.html，臺北：教育部國語推行委員會。（閲覧日：2015/02/17）

洪惟仁1992.『台灣方言之旅』臺北：前衛出版社。

吳守禮（編）2000.『國臺對照活用辭典（上、下冊）』臺北：遠流出版。

城生佰太郎・福盛貴弘・斎藤純男（編）2011.『音声学基本事典』東京：勉誠出版。

辻幸夫（編）2013.『新編認知言語学キーワード事典』東京：研究社。
張屏生2007.『台灣地區漢語方言的語音和詞彙（冊一～冊四）』臺南：開朗雜誌事業。
陳修（編著）2000.『臺灣話大詞典（二版）』臺北：遠流出版。
陳法今1989.「閩南方言的“來去”句」『語言研究』1989年第2期：pp.43-45.
鄭良偉1997.『台語的語音與詞法』臺北：遠流出版。
杜建坊2008.『歌仔冊起鼓：語言、文學與文化』臺北：台灣書房。
董忠司・城淑賢（編著）2010.『簡明台灣語字典』臺北：五南圖書出版。
深田智・仲本康一郎2008.『概念化と意味の世界：認知意味論のアプローチ』東京：研究社。
本多啓2005.『アフォーダンスの認知意味論』東京：東京大学出版会。
本多啓2013.『知覚と行為の認知言語学：「私」は自分の外にある』東京：開拓社。
柳田国男1980.『蝸牛考』東京：岩波書店。（1930年刀江書院（東京）刊。）
林香薇2012.「竹林書局改編臺灣早期閩南語歌仔冊之詞彙觀察」『漢學研究』30: 2, pp.229-264.
連雅堂1987.『臺灣語典』姚榮松（導讀），臺北：金楓出版社。（1933年完成、1957年中華叢書委員會（臺北）初版。）
盧廣誠2003.『台灣閩南語概要』臺北：南天書局。
盧廣誠（編著）2011.『實用台語詞典』臺北：文水出版社。

【用例出典】（下線部は略記号）

Bradman, Tony. (ed.). 2004. *Skin Deep*. London: Penguin Group.
Brown, R. Glenn. 2014. *The Truth Seekers*. Bloomington: AuthorHouse.
Green, Thomas A. (ed.). 2006. *The Greenwood Library of American Folktales*. Vol. III. Westport: Greenwood Press.
Newbegin, Ian. 2012. *Stay: All Is Not What It Seems*. Houston: Strategic Book Publishing and Rights Co..